

2022年4月24日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

創世記 22 : 1～19

ローマの信徒への手紙 8 : 31～39

「主の山に備えあり」

【前奏】

【招詞】 イザヤ書 35 : 1～2

【祈祷】 司式長老

【聖書】 創世記 22 : 1～19、ローマの信徒への手紙 8 : 31～39

【説教】 「主の山に備えあり」

<年間聖句>

今日は、礼拝の後に教会総会が行われます。教会の昨年度一年の歩みを感謝し、また新しい一年を神さまのご計画に従って、祈りをもって歩み出すための、大変重要な総会です。

そこで毎年、教会標語と一年大切に覚える聖句を掲げますが、今年は「主に委ね信頼して歩み出す教会」を標語とし、創世記の「主の山に備えあり」の御言葉を選びました。

この御言葉を、愛唱聖句として大切にしている人も多くおられます。「主の山に備えあり」。主なる神さまが、わたしたちの必要をご存じで、すべてを守り、すべてを備えて下さる。心を励まされ、安心感を与えられる御言葉です。

わたしたちも、主が備えて下さることを信じて、主が恵みを注ぎ、必要を満たして下さることを信じて、歩んでいきたいと願っています。

でも、この御言葉は、わたしたちがただ安心感を与えられるために、示された御言葉ではありません。これは、わたしたちが必要なもの、望むもの、困った時には助けになるものが、わたしたちの計画通りに、わたしたちに都合よく与えられる、ということではありません。

「主の山に備えあり」。この御言葉をわたしたちが口にすること。それは、わたしたちのすべてのものが神さまのものであり、神さまだけが、わたしたちに必要をお与えになることが出来る、ということ。すべては、わたしの思いではなく、神さまの思いに従って、与えられるということ。わたし自身が、自分の手で持っているものは何もない、自分で備えることが出来るものは何もない、ということ。

それらのことを、神さまの御前で認め、受け入れ、告白するということなのです。

「主の山に備えあり」。その本当の意味を知ろうとするならば、わたしたちはこの言葉を語ったアブラハムの物語を知らなければなりません。彼がこの言葉を口にしたのは、神さまからの大変厳しい試練を受けた後のことだったのです。

<アブラハム>

アブラハムは、イスラエルの民の祖先です。神さまは、アブラハムを選び、召し出し、彼と契約を結ばれました。それは、「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」という契約です。

神さまが、アブラハムを大いなる国民にする。そして地上のすべての人々の祝福の源とする。そう言われたのです。

大いなる国民にするとは、子孫が増え、繁栄する、ということです。しかし、この約束をいただいた時、アブラハムと妻のサラには子どもがいませんでした。神さまの契約をいただいたけれども、それが実現するために、決定的に必要な「子ども」という存在が欠けていたのです。

アブラハムは、そのことを自分で何とかしようとして、他の女性との間に子どもをもうけ、色々と自分なりの策を弄したりもしました。アブラハムは神さまを信頼しきれていなかったのです。そうしてそれがトラブルになったり、もう色々なことが起こりました。

しかしとうとう、神さまとの契約から 25 年もたって、アブラハムが 100 歳の時に、やっとサラとの間に、イサクという男の子が誕生したのです。

イサクは、神さまとの契約の確かであることの「しるし」でした。約束が実現するための、着実な第一歩でした。これからはイサクが、神さまの契約の内に、祝福の源となるために、大いなる国民となる将来へ向かって、恵みのうちを歩いていくことでしょう。

アブラハムは、イサクという存在が与えられたことによって、欠けが満たされ、契約が確かにされ、安心と、平安と、希望とを手にすることが出来たのでした。

<神さまの試み>

ところが、神さまは、この最も充実した時を過ごしているアブラハムを「試され」ます。

創世記 22 章 1 節以下には、こうありました。 これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、神は命じられた。

「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

これは、恐ろしいご命令です。神さまは、「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサク」と言っておられます。待ちに待って誕生したイサクが、アブラハムにとってどのような存在かを、よく知っておられるのです。

しかし、このご命令の恐ろしいところは、その愛する息子を失うということだけではありません。イサクを失うということは、やっと実現の一方を踏み出したと思われた、神さまとの契約もまた、取り去られるということなのです。

イサクを待ち望んだ日々、与えられてからの充実した今、そして、大いなる国民へと向かって開かれていた将来の希望。イサクを失うことは、これらすべてを失うこと。神さまとの契約の中で歩んできたアブラハムのすべてが、否定されてしまうようなことなのです。

これは、ただ目の前に困難が襲ってきた、というような試練ではありません。

ここでアブラハムに与えられた試練は、すべてを失うというだけでなく、神さまというお方が分からなくなる。御心が分からなくなる。神さまの救いを、神さまが取り去られる。神さまに見捨てられたかのように思われる。そのような経験をする事なのです。

信仰の歩みの中で、わたしたちもまた、神さまが分からなくなる。御心が分からなくなる。神さまに見捨てられたように感じてしまう。そのような試練を経験することがあります。あまりに不条理で、納得できない。こんなことがあってはいけない。理解できない、したくない。そうして神さまを見失うようなことが、疑うようなことが、人生の中で起こることがあるのです。

神さまを見失うこと。それは、まさに「絶望」を経験することです。わたしたちには、おおよそ耐えられそうにないことです。でも、そのようなことは起こり得るのです。

<わたしはここにいます>

しかし、今日の創世記には、そのような経験をしている、試みの中にあるアブラハムが、それをどのように感じたか。どのように苦しみ、嘆いたか。そのようなことは一切語られていません。語られているのは、そのように神さまを見失いそうな状況のアブラハムが、その神さまのご命令を前に、どう振る舞ったか。この試練を、どのようにして戦ったか。そのことが淡々と述べられているのです。

注目したいのは、アブラハムが呼びかけに応えた時の言葉です。

1節には、神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えたとあります。7節では、イサクが父アブラハムに「わたしのお父さん」と呼びかけ、彼が「ここにいる、わたしの子よ」と答えました。そして11節では、天使が「アブラハム、アブラハム」と呼びかけ、彼が「はい」と答えた。

「はい」「ここにいる」「はい」。このアブラハムの3つの答えは、実はヘブライ語ではどれも同じ言葉で書かれており、「わたしはここにいます」という言葉なのです。

神さまに呼びかけられて「わたしはここにいます」と言う。息子イサクに呼ばれて「ここにいる」と答える。イサクに手をかけようとしたのを止められて、「わたしはここにいます」と言う。

ここには、厳しい現実の中で、耐え難いような状況の中で、それでもひたすら、その時自分に与えられている場所に、神さまに命じられたところに立ち続けようとする、アブラハムの姿があるのです。

今日の聖書箇所は、ただこのアブラハムの姿を語っています。

神さまの御前に立ち続けようとする姿。神さまの思いが分からない。見捨てられたのかも知れない。イサクも契約も何もかも取り去られるかも知れない。

しかし、わたしはここにいます。あなたが求められたところに、あなたに与えられたところに、わたしはいます。そう言い続けるアブラハムです。

わたしはここにいます。アブラハムは、神さまにひたすらそのように答えます。それは、アブラハムからは神さまが見えなくても、神さまはアブラハムを見つめておられる。そのことを信じているからです。信じているというより、もう、そうであるということにしか、寄り纏るところがないからです。わたしはここにいます。わたしは、もはやあなたも、自分も、分からない。しかし、あなたは、わたしを見ておられます。

<神が見ておられる>

アブラハムが、神さまが自分をご覧になっている。そのことに依り頼んでいるのは、7節以下のイサクとのやり取りに現れています。イサクはアブラハムに、「焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」と尋ねます。それにアブラハムは、こう答えました。8節「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」

「きっと神が備えてくださる。」これは、直訳すれば、「神が見ておられるだろう。」「神がご覧になってくださるだろう」という意味です。

自分には、もう神さまが見えない。神さまの御心が見えない。契約が見えない。そのお姿が見えない。何も分からない。しかし、神さまは、わたしたちを見ておられる。神さまはすべてをご覧になっておられ、すべてを知っておられ、神さまがなすべきことを、なして下さるであろう。アブラハムは、そのことに寄り纏ったのです。

神さまの眼差しが、自分たちの上に、確かにある。ただ、そのことだけに、アブラハムは、イサクの命も、神さまとの契約も、自分のこれまでの歩みも、今も、将来のことも、すべてをお委ねしたのです。

思えば、これまでのアブラハムは、自分の信仰の歩みを、契約をいただいて、神さまに従って歩いていく道を、自分なりに見通していたつもりだったかも知れません。

契約を与えられ、イサクを与えられ、これから大いなる国民となり、子孫が増え、世界に祝福が行き渡る。イサクが与えられるまでに、長い長い年月がかかりましたが、苦難も乗り越え、やはりイサクは与えられ、契約が確かであることがわかり、安心することが出来た。救いの確かさを手にすることが出来た。

しかし、それはいつしか、神さまのご計画が、神さまの方法で、神さまの恵みによって実現していくということを忘れさせたかも知れません。救いの計画が順調に進んでいる。思い描くことが出来る将来が、思い通りに前へ進んでいる。これからも、神さまがわたしに必要なを与え、欠けを満たし、自分を満たして下さるだろう。神さまが、自分の歩みを助けて下さるだろう。そのような感覚になっていたかも知れません。

しかし、自分の足りないところを、神さまに助けてもらって、補ってもらって歩むことが、

信仰なのではありません。信仰は、まったく何も持っていないわたしたちが、何もかも神さまの御手にお委ねして、ただ神さまに依り頼んで、神さまを信頼して、神さまが備えて下さった道を、神さまと共に歩いていくことなのです。

アブラハムは、もともと何も持っていないのでした。神さまが選び、神さまが恵みによって契約を与えられたのでした。イサクもまた、神さまから与えられた恵みだったのでした。

アブラハムは、神さまからイサクを献げるように命じられた時に、イサクを自分のものではなく、神さまのものとしなければならないのだと、そのことを求められているのと、気付かされたのではないのでしょうか。

自分の愛する独り息子。もはや、自分の命よりも大切に思う存在であったかも知れません。しかし、イサクは、アブラハムのものではなく、神さまのものである。すべての権利は、神さまがお持ちである。契約は、救いは、神さまが実現して下さる。その、本来自分が立つべき場所に。神さまからすべてを受け取り、神さまに生かされ、神さまを礼拝する者の位置に、アブラハムは立ち帰らされたのではないのでしょうか。

わたしたちもまた、信仰も、救いも、自分の望む形、自分が満足する方法で、神さまが与えて下さることを求めているのではないのでしょうか。自分が必要なものが、必要な時に与えられることが、救いだと思っていないのでしょうか。

しかし、神さまは、わたしたちが自分自身も、与えられているものも、すべて神さまの主権の下にあることを認め、神さまの御手に全てをお委ねすることを求めておられるのです。

思えば、愛する人も、家族も、財産も、仕事も、健康も、生活も、すべては、神さまから与えられたものであり、神さまのものなのです。預けられたものはありますが、わたしのものだったものは、何一つありません。神さまが与え、神さまが取り去られます。

神さまが見えない。御心が分からない。ご計画が分からない。そのような時に、わたしたちは、自分の思い、自分の見ていたもの、自分の理想を打ち砕かれます。

しかし、真実な方である神さまの眼差しが、わたしたちの上に注がれている。自分が神さまの御前に立っており、すべては神さまが支配しておられ、その御心の通りになる。わたしには分からないが、神さまはご存じである。わたしには見えないが、神さまは見ておられる。そこにこそ、寄り縋るしかないと知るならば。わたしたちは、神さまの御手にすべてをお委ねし、そしてただ御手からすべてを受け取る者として、神さまの御前に立つのです。

「わたしはここにいます。」神さまの御前に、そう言って立つ者とされるのです。

試みの時は、その神さまの眼差しへとわたしたちを立ち帰らせ、正しい信仰へ、本来わたしたちが立つべきところへ、導くものとなるのです。

<主の山に備えあり>

さて、イサクを屠ろうとしたアブラハムは、天使にその手を止められます。アブラハムは、もう心の中ではすっかりイサクを神さまにお献げしていたでしょう。神さまのものとして、

イサクを手放そうとしていたのです。

しかし、イサクは生かされた。アブラハムは、イサクを神さまのものとして献げ、そしてもう一度神さまの御手から、イサクを受け取ったのです。恵みとして、イサクを新しく与えられたのです。

そして、その山には、焼き尽くす献げ物にするための雄羊がいた。神さまを礼拝するために必要なものが、神さまによって準備されていたのです。

ここで、アブラハムは「主の山に備えあり」と、語る事が出来たのです。

神さまは、アブラハムがすべてを神さまの御手に委ねることをお求めになりました。すべてを神さまのものとするをお求めになりました。そして、わたしたちにもまた、そのように求めておられるでしょう。

それは、何か神さまがわたしたちから奪い取るとか、搾取するとかではありません。もともと、すべてを備え、すべてを与えて下さったのは、神さまだったのです。

わたしたちの方が、手にしているものを、自分のもののように手放さなくなり、そのことに安心し、依り頼むようになってしまったのです。しかし、わたしたちが、神さまの主権を認めること。神さまお一人だけが、わたしの依り頼むべき神であると認めること。神さまはそのことを求められます。

そして、その中でこそ、神さまはいつも、すべてをご存じの、愛に満ちたその眼差しを、わたしたちに注いで下さっていると知ることが出来るのです。わたしたちが神さまの恵みを受け、生きる者となることを、望んで下さっていると知ることが出来るのです。

いつもわたしたちを見つめていて下さる神さまは、神さまの最も良いご計画に従って、神さまの定められた時に、神さまのお決めになった方法で、わたしたちを確かな救いへと導き、豊かな、溢れんばかりの恵みを注ごうとしておられるのです。

そうして、神さまがわたしたちのために備えて下さった、最も大きな恵み、最大の賜物が、神さまの愛する独り子イエスさまでした。

アブラハムがイサクを献げなければならなかった、その試みの最も深い悩み苦しみを味わわれたのは、最後まで味わい尽くされたのは、父なる神さまご自身でした。

アブラハムに、イサクを献げて、すべてが神さまのものであることを認めるよう求められたように。神さまは、御自分の恵みのすべてがわたしたちのものであることを示すために、御子イエスさまを十字架の死によって献げて下さったのです。

神の御子が、わたしたちに与えられるのだと。神の御子の命によって、罪の赦しも、永遠の命も、復活も、神さまの恵みがわたしたちにすべて与えられるのだと、示して下さったのです。神さまがわたしたちを見つめる眼差しは、そのようにわたしたちを救おうとなさる、ひたすらに愛に満ちた眼差しです。

わたしたちのために、主の山に備えられていたのは、この神の御子イエスさまに他なりません。

今日読まれたローマの信徒への手紙 8:32 にはこうありました。「私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜らないことがあるでしょうか。」

御子をさえ惜しまず死に渡された方は、父なる神さまでした。そして、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜るのだと。御子の命と、そしてわたしたちが神さまを礼拝し、ほめたたえるために必要なすべてのものを、神さまは喜んでわたしたちに賜るのだと、そう聖書は告げているのです。

わたしたちも今、与えられたものは、すべて神さまのものであることを認め、その御手にすべてをお渡ししたいのです。自分のもののように握りしめるのではなくて。手放すのを恐れて惜しんだりするのではなくて。自分の計画を思い描くのではなくて。たとえ見通せない時にも、分からない時にも、しかし神さまは、わたしたちをご覧になっている。御子をも賜る恵みの眼差しで、独り子を惜しまず与えて下さるほどの愛の眼差しで、神さまはわたしたちを見つめていて下さる。ただそのことに、寄り縋りたいのです。

神さまは必ずや、神さまご自身の御心、ご計画に従って、神さまのご栄光が、その恵みが、最も豊かに溢れ出る仕方で、すべてを与えて下さいます。わたしたちがすべてをお委ねし、すべてをお献げしたなら、わたしたちは、神さまの御手から、御子イエスさまの命と共に、さらに豊かな恵みを加えられて、受け取ることが出来るのです。

わたしたちは、御手にすべてをお委ねして、お返しして。そして、神さまの御手から、また新しく、さらに豊かな恵みを、祝福を、受け取らせていただきたいのです。

この新しい年度の教会の歩みも。一人一人も。この、御子イエスさまを賜った神さまの眼差しの中に立つことが出来ますようにと祈ります。

わたしたちの目には、不安や、恐ればかりが移ったり、あるいは自分の望むことばかりを見ようとしたりすることがあります。

しかし、わたしたちは、わたしたちの上に注がれている神さまの深い愛の眼差しをこそ、見つめる者でありたいのです。その眼差しの中で、わたしはここにいます。わたしたちはここにいます。そう言って、御前に立ち、与えられたところに、神さまが望んでおられる場所に、しっかりと立ち続けたい。「主の山に備えあり」。確信と信頼をもって、このことを信じる者になりたい。そう祈り願います。

【お祈り】 天の父なる神さま

ただあなたの眼差しだけを見つめさせて下さい。それは、御子までも賜った、愛と憐れみの眼差しです。その眼差しに信頼して、すべてを御手にお委ねして、「わたしはここにいます」と、ひたすら御前に立つ、わたしたちの群れでありますように。

そして、ただあなたの御手から、救いも、恵みも、必要なあらゆるものも、豊かに受け取らせて下さい。「主の山に備えあり」とのまことの信仰に立たせて下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 4 6 3 「わが行くみち」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 9 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン